

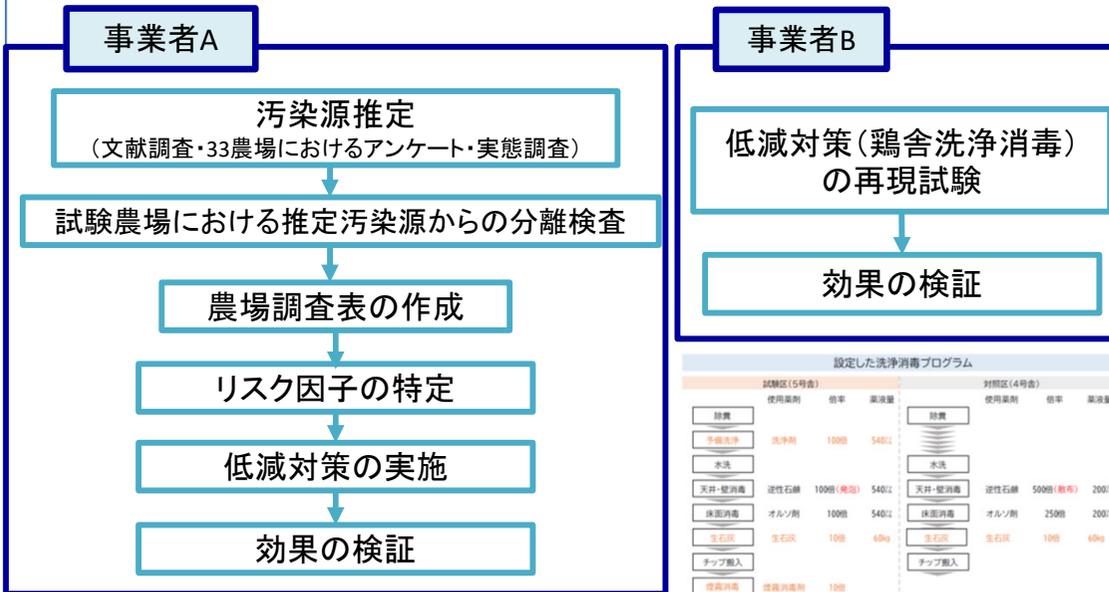
肉用鶏農場における食中毒菌(カンピロバクター及びサルモネラ)の汚染リスクを低減するための研究

【研究背景・目的】

カンピロバクターやサルモネラに汚染された食鳥による食中毒は、わが国の細菌性食中毒の大半を占めていることから、フードチェーン各段階における衛生管理手法の改善は急務となっている。本研究では、試験農場において食中毒菌の侵入及び蔓延に寄与の高い汚染源を特定の上、汚染リスクの低減対策を実施し、同対策による汚染リスクの低減の実証及び再現性を証明するデータを示すことを目的とする。

【研究内容】

試験農場(事業者A・堆積糞養鶏実施)について汚染源を推定するための実態調査等を行い、農場調査表を作成。調査票を用いてリスク因子を特定の上、低減対策として介入試験を実施し、対策の効果を検証。低減対策のうち、鶏舎の洗浄消毒方法について、事業者Bにおいて再現試験を実施。



設定した洗浄消毒プログラム

試験区(5号舎)				対照区(4号舎)			
使用薬剤	回数	濃度	実施量	使用薬剤	回数	濃度	実施量
除糞				除糞			
手洗い	洗浄剤	1000	540L	手洗い			
水洗				水洗			
天井・壁消毒	逆性石鹼	1000(乾湿)	540L	天井・壁消毒	逆性石鹼	5000(乾湿)	200L
床面消毒	オルソ剤	1000	540L	床面消毒	オルソ剤	2500	200L
生石炭	生石炭	100	60kg	生石炭	生石炭	100	60kg
チップ搬入				チップ搬入			
産糞消毒	産糞消毒剤	100		産糞消毒			

【成果】

- ①サルモネラは、導入前・導入時・3週齢時、更には孵卵場の環境検体からの検出から、垂直感染や農場での持続的生存の可能性大。
- ②カンピロバクターは、中抜き出荷の有無はリスク因子の可能性はあるが、感染源は特定できず。孵卵場や、3週齢以前の環境及び死鳥検体からはほぼ分離されなかったため、サルモネラと感染経路は異なると考えられた。
- ③サルモネラは鶏群に入っても、全羽に広がるわけではないが、カンピロバクターは一度鶏群に入ると、鶏群全体に広がる傾向。出荷時の盲腸便中の菌数は、カンピロバクターは6から8乗/gのオーダーで検出された。
- ④同一農場の同一鶏舎でも、生産サイクルによって陽性・陰性が変わった。
- ⑤農場調査表を活用した実態把握を試みて、総合的に、食中毒菌の侵入防止(バイオセキュリティ)に取り組まないと、出荷時鶏群が陽性になると考えられた。

【成果の活用】

- ・農場調査表を活用した実態把握及び総合的な衛生対策の検討事例を通じた農場衛生管理向上への寄与
- ・サルモネラについては上流(種鶏場、孵卵場)も含む衛生対策の必要性の周知
- ・空舎後の鶏舎の洗浄・消毒(除糞・乾燥も含む。)の効果の微生物検査による妥当性確認、検証と見直しは必要

代表機関: 国立大学法人山口大学共同獣医学部

研究総括者: 豊福 肇

問い合わせ先: TEL 0839335827

E-mail: Toyofuku@yamaguchi-u.ac.jp